乳幼児教育相談の実態と取り組み(2)

～２歳児のグループ活動を通して～

両角五十夫　佐藤　幸子　山中　健二
林　徳子　森　敬子　小柳　達朗　宍戸　淳子

本校乳幼児教育相談では、保護者（主に母親）が自信をもって、楽しく子育てができるように支援をしていくことを目的にしている。学校での活動が母子の実際の生活場面にどのようにつながるかという視点を大切にしてきた。今回、２歳児のグループ活動における支援の実際について、そのねらいや取り組みについてまとめた。ねらいや教師の関わり、母親支援が適切であったかを検討し、さらなる支援内容の充実を図るために、子どもの育ちや母子関係の育ちを振り返ることの重要性を再確認することができた。

【キーワード】　乳幼児教育相談　グループ活動　生活習慣　母親支援

1　はじめに

本校乳幼児教育相談では、保護者（主に母親）が自信をもって、楽しく子育てができるように支援をしていくことを目的にしている。

２歳児になると、子どもたちの興味が広がり、自分で何でもやってみたくなったり、自分なりの思いをもって行動したりするようになってくる。そのような子どもの成長を､母親はとてもうれしく感じる。一方では、これからすることや母親の気持ちを子どもにどのように伝えたらよいか、どのように理解させたらよいか等、悩んだりとまどったりすることも多く見られるようになる時期である。食事や排泄の生活習慣がうまく身につかないことも「聴覚に障害があるゆえの聞こえにくさ」からくることだ、と考えてしまうことも時としてみられる。

子どもにとって、生活の全てが遊びである。遊びの中で、大人が子どもの主体性や自由な発想を大事にしながら関わる重要性は言うまでもない。しかし一方では、基本的な生活習慣は大人が子どもに教えていく場面が多いため、遊びと生活習慣は相対するものとして考えられがちである。生活習慣を身につけていく過程において、子どもの主体性やその子なりの気づきを見守り、励ましていくことが、子どもの中に自分の力でできたという気持ちを育て、何事にも楽しんで取り組もうとする姿に結びついていくことを私達は日々の実践の中で実感している。

乳幼児期は、家庭での生活が中心である。私達は、グループ活動を考えていく時、学校での特別な活動として位置づけるのではなく、実際の生活場面にどのようにつながるかという視点を大切にしている。本稿では、２歳児のグループ活動における支援の実際について､そのねらいや取り組みをまとめていく。

2　乳幼児教育相談のねらい

(1)　全体のねらい

本校幼稚部教育課程における乳幼児教育相談の具体目標は、以下の通りである。

①愛情と信頼感に基づいた、安定した母子関係を育てる。
②心身の健康や人間関係、基本的な生活習慣の育成等、子どもの全体的総合的発達を図る。
③子ども自身の主体的な聴覚学習を促す。
④①～③を基に、言葉の素地をつくる。
⑤聴覚障害幼児の育て方について、両親の理解を深める。

(2) 2歳児のねらい

本校幼稚部教育課程における 2 歳児のねらいは、以下の通りである。

①愛情のこもった養育の中で、食事、排泄、衣服の着脱などの簡単な身の回りのことを自分でしようとする。
②身近な人や友達と関わって遊ぶ楽しさを味わい、生活の中で経験したことを中心に興味を広げる。
③母親以外の大人や友達に親しみ、安定した人との関わりの中で生活を楽しむ。

3　2歳児の活動内容

2歳児のグループ活動は、5～6人程度のグループで週2回行われている。日課の例を表1に示す。

表1　2歳児のグループ活動(日課の例)

	登校
	朝の支度
10:00	補聴器の点検
	自由遊び(母子で遊ぶ)
	片付け
	名札付け
	設定遊び(内容は日によって変わる)
	・手遊び歌
	・リズム遊び
	・絵本
	・紙芝居
	・製作
	・その他、むっくりくまさん アンパンマンごっこ しっぽとり　等
	トイレ
	手洗い
12:00	お弁当（昼食）
	グループ懇談
	出席シール貼り
13:30	あいさつ　おかえりのうた

グループ活動では、子どもが見通しをもって活動できるように大まかな流れ（日課）を決めている。どの場面においても、母子での活動と伝え合いを基本にしている。また、活動の内容を考えていく際に、家庭での実際の生活場面にどのようにつながるかという視点も大切にしている。

週2回行われている2歳児のグループ活動の様子を見ていると、子どもたちは、次第に友達と一緒に遊ぶことを楽しめるようになってくる。それまでは、母親のそばで遊んでいたり一人で遊んでいたりした子が、友達や教師との遊びに興味を示したり、楽しんだりできるようになってくる。このような子どもの姿を見て、母親の関わり方も変わってくる。この時期、子どもの様子を見守り、必要に応じて関わることが大事になってくる。そのためには、①子どもの気持ちの動きをつかむ視点をもつこと、②子どもの動きを丁寧に見守り、応じること、等が必要になる。グループ活動の中で、このような意識をもちながら子どもと関わる経験を積み上げていくことで、母親自身が生活の中で実践してみるケースも多く見られる。

また、2歳児期では、子どもの気持ちと母親のさせたい気持ちがぶつかることも多い。例えば、自由遊びのおもちゃの片付けなどがそれにあたる。こうしたいという子どもの気持ちをわかってやりながらも、母親が伝えたいことをきちんと伝えていくこともこの時期大事になってくる。このような場面は、グループ活動の様々なところで多く目にする。教師は、一つ一つの場面を、母子で気持ちを通い合わせるための大切な機会ととらえ、じっくりと時間をかけながら、母親と共に話し合ったり、実際に関わって見せたりしながら支援している。

4　グループ活動の実際

ここでは、グループ活動のなかで、（1）登校～朝の支度、（2）自由遊び～設定遊び、（3）手洗い～お弁当、の場面をとりあげ、各場面における教師のねらいや実際の母子の姿などについて報告していく。

(1)　登校～朝の支度

朝、子どもは母親と一緒に登校してくる。乳幼の玄関を入ると教師や友達に「おはよう。」と挨拶をする。靴を脱いで下駄箱に入れ、自分の靴箱から上履きを出す。上履きを履いて、自分のグループの部屋に向かう。荷物をロッカーに入れて、タオルをタオル掛けに掛けたり出席カードを出したりして、母親と一緒に朝の支度をする。このような毎回繰り返される場面を通して、子どもが身の回りのことに意識を向けて取り組んだり、母親が子どもにわかるように伝えたりすることを大事にしている。

ここでは、その中の靴を脱いでから部屋に向かうまでの場面を例にあげて、そのねらいや取り組みについて述べる。

〇靴を脱ぐ。

母親は、子どもに「靴を脱ぐよ。」と声をかける。中には、まわりのことに気を取られてなかなか取り掛からない子どももいる。そういうときは、「〇〇だね。かわいいね。」と子どもの見ている方の話をしたり、トントンと軽く靴を触って脱ぐことに意識を向けさせたりしてから「じゃあ、靴を脱ごう。」と声をかけるようにする。

〇下駄箱に靴を入れる。

「靴を脱いだね。」「どこに入れようか。」と、母親が声をかける。子どもが靴を入れようとすると、母親も「ここに入れようね。」と指さしながら言う。子どもが母親の靴も入れると、「ママの靴も入れてくれたね。ありがとう。」などとやりとりする姿も見られる。母親が子どもの行動を認めてほめたり、子どももほめられてうれしくなったりすることで、母子の関わりがさらに深まっていく。

〇靴箱から上履きを出す。

２歳児は、一人ひとりの子どもに動物や花、虫などのマークが決められていて、靴箱にもマークのシールが貼ってある。「〇〇ちゃんの上履きは、どこかな。」「あったー。」と母子で探して上履きを出す。はじめの頃は、母親が「〇〇ちゃんはガオーのライオンだね。」などと身振りもつけて言いながら、自分のマークに興味をもたせわかるようにしている。マークがわかるようになると、母親が実際に場所を指さなくても「〇〇ちゃんのライオンはどこ？」というように声をかけると、子どもは自分でマークを探して見つけるようになる。こうしたことも、やりとりする中でわかって行動する一つの力となっていく。

〇上履きを履く。

母親は「上履き（くつ）を履こう。」と言って、子どもが履くのを見守る。なかなか履けなくて焦れたりするときは、「履けないね。」「むずかしいね。」と気持ちを汲んで言ったり、「がんばれ。」「もうちょっと。」「上手、上手。」と励ましたりして、自分で履こうという気持ちをもたせていく。それでも、履けないときには、「ママがちょっとやってあげるね。」と手助けしつつ、最後は子ども自身の手で履けるようにする。「やったー。」「〇〇ちゃん自分で履けたねー。」「すごいね。」と母子で喜び、子どもはやり遂げた充実感を味わう。自分の力でできたという思いが、何事にも取り組もうとする姿勢につながっていく。

〇部屋に向かう。

「ぴょんぴょん、うさぎのお部屋に行こう。」「うさぎのお部屋はどこかな。」と母子で話しながら、部屋に向かう。母子で「行こう！」「どこー？」などと言うことで、子どもが母親の声を聞き自分で声を出したり言葉を模倣したりする。また、「ぴょんぴょん」という擬態語やうさぎの動作も手がかりとなり、子どもは「うさぎのお部屋だ」ということがわかる。どこに行くのかきちんとわかってから向かうということも、物事を理解する力につながっていく。

このように、身の回りのことに意識を向けてやり遂げていくことは、いろいろな物事に自ら意識を向け興味をもって取り組んでいく基礎となるものである。母親も、自分の力でできるように工夫したりわかるように伝えたりすることによって、子どもの力を育てていくことができる。また、子どもの一つ一つの行動に母親が丁寧に言葉をかけていくことによって、言葉の基礎ができていく。教師と母親と一緒に具体的な手立てを考え実践していきながら、家庭でも母子で取り組めるようにしている。

(2)　自由遊び～設定遊び

①　自由遊びのねらいおよび内容

これは、母子が自由な遊びの中でどのように関わっているかを見て、教師の立場で援助していくねらいがある。子どもにどのような話しかけをするか、どのように気持ちを汲んで手助けをするかなど、それぞれの母子が関わり方を学ぶ場である。また、教師も母親の接し方をよく観て、子どもに合った接し方を母親から学ぶこともあり、お互いが共通理解のもとに活動していくことも大事にしている。また、どう関わることで子どもの気持ちに寄り添えるかなど、乳幼で行ったことを、家庭で遊んでいるときにも母親が実践していく機会にもつながる(表 2)。

表 2　乳幼での自由遊びと家庭場面の結びつきの例

<table>
<tr><th>乳幼での自由遊び</th><th>家庭での自由遊び</th></tr>
<tr><td>・母子で遊ぶ。
・教師と遊ぶ。
・友だちと遊ぶ。友だちの母親も交えて遊ぶ。</td><td>・母子で遊ぶ。
・きょうだいと遊ぶ。
・家族と遊ぶ。</td></tr>
<tr><td colspan="2">○いろいろな人と接することで母子の視野が広がり、物の見方、考え方の基礎基盤が育つ。</td></tr>
<tr><td colspan="2">○子ども一人ひとりにゆっくりじっくり付き合うことで子どもの思いに寄り添い、子どもの気持ちを理解することにつながる。</td></tr>
<tr><td>・片付けをする。
・母子で片付ける。
・片付ける場所がわかり自分でしまう。
・教師や友だちと一緒に片付ける。</td><td>・片付けをする。
・母子で片付ける。
・片付ける場所を決めておく。
・一人で片付ける。
・家族と片付ける。</td></tr>
<tr><td colspan="2">○一緒に行うことで片付けの意味もわかり、片付けをするようになる。家庭でも遊んだあとは片付けるということを習慣化することができる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">○片付けの歌をエレクトーンで弾いたり手拍子で歌ったりしながら、片付けをすることにつなげる。</td></tr>
</table>

②　設定遊びのねらいおよび内容

これは、担当者が計画し、母子の接し方、コミュニケーションの仕方、理解力、協調性など、あらゆる観点から聴覚障害幼児を育てていくことをねらいとしている。自由遊びとは違い、計画された活動（以下、設定遊び）の中で、母親も教師の意図を汲み、子どもに理解させて、一緒に活動していくことが重要となる。聴力に障害のあるわが子にどのように向き合えばよいかを学んでもらう大切な活動の場である。どういう手立てで、どのように伝えることで理解へ結びつけていけるか、教師が考え手本を示しながら母親を支援していくのである(表 3)。

表 3　乳幼での設定遊びと家庭場面の結びつきの例

<table>
<tr><th>設定遊び（例）</th><th>家庭でできる活動</th></tr>
<tr><td>・名札を渡す活動
・自分の名札がわかる。
・友だちの名札にも興味をもち、わかる。
・自分の名前を呼ばれたら、「ハーイ」と手をあげることができる。
・「ちょうだい」と言って名札をもらう。
・母親に「どうぞ」と言って渡す。</td><td>・食事のとき
・だれの食器かわかる。
・「パパ」「ママ」と言って食器を置く。
・母親と「これは、はし」など言いながら並べる。
・「ごはんどうぞ」と父親に渡す。</td></tr>
<tr><td colspan="2">○大人は、きちんと向かい合って子どもの目線の高さで話す。
○子どもの耳に届くような声で話しかける。</td></tr>
<tr><td>・手遊びをする。
・絵カードや写真などを提示する。
・曲に合わせてリズムをとり、ダイナミックに表現する。</td><td>・手遊びをする。
・玩具や写真を身近な場所に置き、いつでも提示できるようにする。
・家族で楽しく歌う。</td></tr>
<tr><td colspan="2">○手遊び、紙芝居、絵本などの活動を通して、思考力、理解力、協調性などが育つ。また、聴覚を通して、言葉の理解へとつなげる。</td></tr>
</table>

(3)　手洗い～お弁当（昼食）

①　手洗いのねらいおよび内容

2歳児のグループでは、設定遊びが終わると次はお弁当の時間となる。子どもたちにお弁当の絵カードを見せて「おべんとうだよ。」「あむあむしよう。」と声をかける。同時に、洗面台の写真カードを一緒に提示して手を洗うことを伝える。「てをみせて、きたないね。」「じゃぶじゃぶしよう。」と伝え、洗面台の方を指さし「あっちいこう。」と誘って教師と母親と一緒に行く。洗面台の前にきたら「ぎゅうぎゅうしようね。」と腕まくりするように伝える。その際、母親は、実際に腕まくりをして見せながら「ぎゅうぎゅうしようね。」と子どもに伝えている。

また子どもが手を洗っている時、冷たそうな表情やしぐさをしたら、「冷たいね。」と子どもと同じしぐさをして子どもの気持ちに寄り添ったりもしている。手を洗い終えると、子どもはタオル掛けにかかっている自分のタオルを見つけて手を拭く。充分にふきとれていない時には、「びちょびちょだね」と声をかけ、手元に意識を向けさせるようにもする。

手洗いは、家庭でも毎日繰り返され、一日のうちで何度も経験することである。学校での活動を通して、家庭でもきちんと手を洗う習慣が身につくように働きかけている。食事の前だけではなく、外から帰って来た時や手が汚れている時に、子どもが自分から手を洗おうとするのも大事なことである。「手を洗う」という一連の行動が生活の中で習慣化し、自分から手を洗うことへの意識づけになるようにしていきたい。

②　お弁当（昼食）のねらいおよび内容

お弁当の時間は、子どもたちにとって最も嬉しい時間である。手洗いが終わると、子どもたちはロッカーの中に入っている自分のお弁当を部屋にもってくる。2歳児になると、友達と一緒に食べることも嬉しいようで、友達を指さし「○○ちゃん。」と言って横に座ろうとする姿もよく目にする。子ども自身が自分から気持ちを表現し、積極的に行動する場面のひとつである。

教師は、子どもたちが席に着くと、「○○ちゃん、おみずどうぞ。」と言って、コップに水を入れて順番に渡す。子どもたちは、「ありがとう。」と言ったりおじぎをしたりして水の入ったコップを受け取る。2歳児になると、まだもらっていない友達を指さして「ない」と言って心配そうな表情を見せたり、教師に知らせたりするようにもなってくる。人への関心が育ち、友達を気遣う様子を見て、母親が子どもの成長を感じられる機会にもなっている。

教師は、水を配り終えると、エレクトーンで「おべんとうのうた」を弾く。子ども達は、早く食べたいという気持ちがみなぎり、一斉に教師の方を見て両手を広げて歌う素振りを示してくれる。教師も母親もこの時が一番、教師の方をしっかり見ていると実感出来る場面でもある。「おべんとうのうた」を歌い終わると、教師はみんなが見える位置に座り母親や子どもと一緒に両手を上げて「ぱらぱら、ぱちん。」と言いながら手を下ろして合わせ「いただきます。」と言葉をかける。

子ども達は、早く食べたくてしかたがない様子で弁当を袋から出し、はしやフォークを使って、美味しそうに食べている。教師は、子どもの近くにいき「おいしいね。」「うわあ、おいしそう。」と声をかける。「うん。」とうなずいて一生懸命食べている姿がほほえましく思える。

食事をすることは、手洗い同様、家庭で毎日繰り返されることである。食事への興味、関心をもたせながら、食べることへの意欲を育てたい。また、楽しい雰囲気で食べる充実感などをグループ活動を通して味わい、人との関わりの大切さを知ることにもつなげていきたいと考えている。

5　おわりに

スカイツリーは日本人なら誰でも知っている世界一の高さを誇る電波塔である。さすが６３４メートルの高さがあると関東平野の至る所からその勇姿を眺めることができる。遠くからの眺めもさることながら、近くでみるとその高さ、大きさには驚嘆せざるを得ない。その圧倒的な存在感に誰もが驚嘆するだろうが、その時、それを支える基礎の構造物の存在に思いを巡らす人はそう多くはないだろう。巨

大な構造物スカイツリーには、それを支える確固とした土台が必要なのである。

実は聴覚障害児のことばの育ちにも同じことがいえる。ことばがスカイツリーだとすると、そのことばが生まれてくるためには確固とした土台が必要なのである。つい表面にでたことばの育ちに目が向いてしまい、それを支える土台部分を育てる事をおろそかにしがちである。確固とした土台に支えられていないことばは、土台の無い塔がすぐ崩れて役に立たないのと同じようにことばとしての意味を持たないと言っても過言ではない。本校の乳幼児教育相談ではその土台部分を育てることを一番大切にしてきている。本稿では、本校乳幼児教育相談でのことばの土台作りの取り組みをまとめてみた。

今回は特に２歳児グループを中心に具体的な支援事例や、支援のねらいをまとめた。２歳児は、０歳児、１歳児で培われてきた土台の上にことばという塔を築き始める時期に当たる。そこでの具体的な場面を例に挙げてみた。単に指導事例をまとめただけではないか、もっと効率的な指導方法はないかという指摘を受けるかも知れないが、言語指導には特効薬的な指導方法は無いと私たちは考える。例に挙げてきたような関わりを地道に積み上げていくことこそが一番効率的な言語指導だと考えている。効率の良いマニュアル化、プログラム化を求める人は多いのだろうが、効率の良いマニュアル化、プログラム化ができないところに言語指導の難しさがあると思う。その意味で今回まとめた取り組みが、ことばを育てる関わりで困っている人に何らかの参考になってくれればと思う。しかし、今回挙げたような関わりが本当に適切であったかを、子どもの育ちから常に振り返り、検討していくことはもちろん大切なことである。今後も、子どもの育ちや母子関係の育ちを振り返りながら、ねらいや教師の関わり、母親支援が適切であったかどうかを検討し、さらに支援内容を充実させていきたい。

〔参考文献〕

・幼稚部教育課程（０～５歳児）（2011）筑波大学附属聴覚特別支援学校　幼稚部